

第二章 社会人の心構え

入社すると必ず新入社員研修がある。短期間の研修であり、そこでは専ら挨拶の仕方などの基本中の基本事項と、会社の仕組みや業務の概要が教えられる。新入社員教育の中心は職場での実践を通じて体験的に教える OJT (On the Job Training) なので、社会人としての心構えや周囲の人たちとの付き合い方といったことは研修の場では教えられず、それらは各人の自覚に委ねられる。

社会人としての心構えや具体的な振舞い方は「先輩の後ろ姿を見て覚えろ」とよく言われる。勘の働かない者、空気の読めない者、言われたことしかしない者、自分を振り返ることの出来ない者は取り残されるか、あるいは排除されてしまう。そこには、イジメとは異なる大人としての最小限の振舞いや心構えはできているものとの前提がある。その前提この前提が身についていないと「あいつは駄目だ」と思われてしまう恐れがある。周囲の人たちから諦められ、社会人として認められなくなってしまう。気がつく自分の居場所がなくなっていることとすらあるので注意しよう。アイデンティティの喪失へと繋がっていくが、その原因は飽くまでも本人にあるのであしからず。

社会生活の基本は相手の立場に立って物事を考えること。かつて筆者が入社した時、ある方から「チェンジ・チェアー (椅子を替える)」という言葉が投げかけられた。人の世界は関係性のなかで成り立っている。人とは一人で生きては行けず、お互いに支えあいながら生きる生き物である。「間柄」が大切であり、相手の立場と自分の立場を常に考えながら行動するところに「人の絆」が生まれてくる。

この場合、「ケジメ」が大切となる。ケジメとは T P O (時と場所と状況) を弁えた行動であり、その行動をとるには相手の立場への配慮が不可欠。T P O を弁えた行動は信用につながり、人の絆の基盤となる。そのことを「チェンジ・チェアー」という言葉に集約してくれたのである。

ところで、日本の社会では各人がどのような会社に属しているか、即ち各人の所属集団や肩書きでその人がどのような類の者であるかが判断される。会社員になればどこに行っても会社の看板が付きまとうことになり、その看板のお蔭で信用が得られ、銀行から住宅ローンを借りるなどといったことも出来る。また、日本の社会では社員を通じてその所属する会社がどのような会社であるかが判断される。社長は会社の顔であると同時に広告塔であるが、実は社員一人一人も広告塔の役割を担っていることを忘れてはいけない。会社の看板を傷つける行為をすれば厳しく処分される。会社は自己防衛本能を強く持つから、オフタイムであっても心して過ごすこと、即ち、ある種の緊張感を持って日常生活を営むことが社員一人一人に求められるのである。

世の中を甘く見てはいけませんが、かといって恐れる必要もない。社会人となるにあたっては社会人としての振舞いを身につけておく必要があるが、加えて、社会人となる心構えをしっかりと持っておけばよいのである。日々の生活においては「チェンジ・チェアー」を基盤とし、一方において、自分は会社を背負う人間であるという自覚をもって生活する、

それが社会生活を送る心構えの基本である。社会人の具体的な心構えは種々あるが、ここでは渋沢栄一と松下幸之助の言葉を拠り所として整理してみた。